



三年前の一月二十六日夜、Mさんが亡くなった。八十八歳。自宅で静かに息を引き取った。その前年の暮れ、めまいがするとのこと。往診したときには、既に貧血がかなり進行していた。精査は望まず、本人に負担のない程度の検査にとどめたが、腫瘍(しゅよう)マーカーであるがん胎児性抗原(CEA)が九百以上と異常高値。身体所見などから恐らく胃がんである。

いつも感謝の言葉

翌年一月に入り、毎日のように往診に行った。Mさんはいつも両手を握って感謝してくれた。「ありがとう。痛いところはない」と。一日の食事は栄養

家族が支え、穏やかな最期

ドリンク一缶と巻きずし一個。とにした。毎日五百リットの点滴だけをする。この年は十六年ぶりの大雪。

役場の前でも四〇センチの雪が積もった。雪道の往診は初めてだった。

た。空き地に車を置き、雪の積もった道路を数百歩歩いて行った日もあった。家族が雪かきをして道を作ってくれていた。

家族はとてもよく介護をされた。次第にMさんは弱っていき一人トイレに行けなくなってきた。それでも家族はみんなで支えた。

一月二十六日の午後もいつもと同じように往診に行った。Mさんはかなり弱っていた。脈も速く微弱だった。いつもと同じように点滴をした。この日は珍しく点滴が一回で入った。

自分もその時は

夜八時三十分、家族から電話が入った。「息をしない、八時二十五分ごろ亡くなったみたい」と。凍った山道を車で二十分、午後九時にMさん宅に到着。すでにご家族は全員集合し、近所の方々も大勢集まって

いた。部屋に通され、死亡確認をする。

家族みんなから感謝の言葉をかけていただいたが、「自分も亡くなるときはMさんのように亡くなりたい。皆さんのおかげです」と、私も家族のみんなに感謝した。Mさんを取り囲んだみんな、長男さん夫婦や娘さんたち、遠くから帰ってきた息子さんたちには笑みがあつた。

帰りの車の中でなぜか涙が出てきた。ふだん病院で患者さんを見とった時は、亡くなった時間を告げ、家族は泣き、私は病室を出る。しかしMさんの場合は全く逆だった。私が亡くなった時間を告げられ、家族には笑みがあり、帰り道で私が泣く。Mさんは天国に行く途中、その様子を振り返りながら見ていたのかも知れない。表情は穏やかで、ただ眠っているようだけのように見えたMさんの顔を思い出しながら、「これだな」と思った。



Mさん宅へ通じる道。亡くなる3日前、往診途中に撮影した

嶺北中央病院

【私の勤務地】高知県西北部の四万十川源流沿いに関かれた自然豊かな町で、坂本亀馬が土佐藩を脱藩したときに通ったという山深い町。人口約4300人。恵まれた自然を生かし、風力発電を軸に森林認証の取得や千枚田オーナー制度などの施策を展開し、環境保護と町の活性化に取り組んでいる。

その年の四月から、私は後期研修として一年間ホスピスで学んだ。

(次回予定は福井県)